

アジア・アフリカ言語文化研究所  
東京外国語大学

要覧 1980



目 次

概 要

歴史と性格 ..... 1  
組 織 ..... 2

研究活動

共同研究プロジェクト ..... 4  
言語情報機械処理 ..... 7  
言語研修 ..... 8  
海外学術調査 ..... 9  
助手等の現地投入 ..... 10  
外国人研究員 ..... 11

施 設

図 書 室 ..... 13  
音声学実験室 ..... 14  
電算機室 ..... 15  
職 員 ..... 16  
出版物一覧 ..... 18

— 表紙写真説明 —

シンビュ・ナーダ・ミンガラー  
(*šinbyú nādā mingāla*, 得度・穿  
耳式)はビルマ人の重要な通過儀  
礼のひとつである。10才前後にな  
ると、男の子は得度して沙彌にな  
り女の子は耳朵に穴をあけ耳飾り  
をつける。得度・穿耳の儀式に先  
だって、宮廷の王子さま王女さま  
よろしく綺麗に着飾って壇上に勢  
揃いした少年少女が地域社会の人  
人に披露される。得度式と穿耳式  
は本来別個のものであるが、子ど  
も自身にものごころのつく年頃に  
なったことを自覚させるという共  
通の意義をもつ儀礼であるので、  
いっしょに披露されることが多い。  
また、得度・穿耳式は同じ年格好  
の子どもを集めて、親族あるいは  
地域で合同で行なうのが通例であ  
る。(マンガレーにて、藪 司郎)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES  
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA

TOKYO GAIKOKUGO DAIGAKU  
4, NISHIGAHARA, KITA-KU, TOKYO 114  
TEL. 03-917-6111  
Cable Address : GENGOBUNKA TOKYO

# 概 要

## 歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究，ならびにこれらの地域における諸言語の辞典編纂，および教育訓練を行なうことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語，およびそれを通じて，これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため，言語研修を実施すること。

以上の三点が本研究所の主要な目的です。

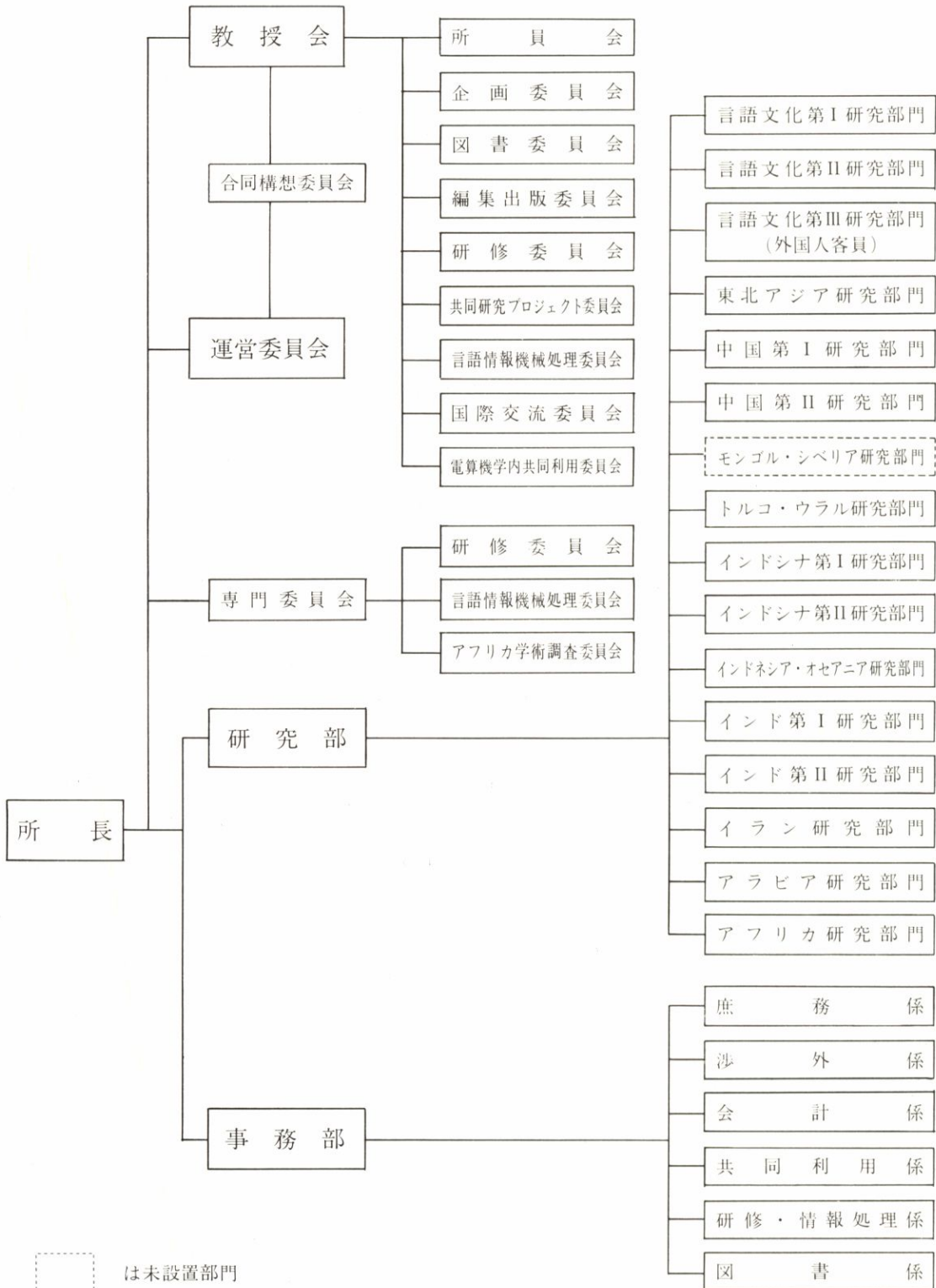
\* \* \*

共同利用研究所は，あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し，相互の接触や交換の機会をつくり，それによって研究の発展・進歩を促すことを目的としています。

戦後日本の復興が進むとともに，その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後，各方面の理解と協力を得て，1964年4月1日に，東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来，整備拡充が進み，今日では15部門の研究所に成長していますが，今後さらに1部門の増設が予定されています。



# 組 織



☐ は未設置部門

## 運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問を受けます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第8期(1979.2~1981.1)の運営委員は以下の通りです。

荒 松 雄	東京大学教授	中 根 千 枝	東京大学教授
石 川 栄 吉	東京都立大学教授	西 田 龍 雄	京都大学教授
伊地智 善 継	大阪外国語大学学長	伴 康 哉	大阪外国語大学教授
井 上 和 子	国際基督教大学教授	坂 野 正 高	国際基督教大学教授
梅 田 博 之	所員	藤 枝 晃	京都大学名誉教授
岡 田 英 弘	所員	松 山 納	東京外国語大学教授
小 沢 重 男	東京外国語大学教授	三根谷 徹	国学院大学教授
小 泉 文 夫	東京芸術大学教授	護 雅 夫	東京大学教授
小 堀 巖	東京大学助教授	八 木 健 三	北星学園大学教授
柴 田 武	埼玉大学教授	山 田 信 夫	大阪大学教授
祖父江 孝 男	国立民族学博物館教授	山 本 登	慶応義塾大学名誉教授
田 町 常 夫	九州大学教授	渡 部 忠 世	京都大学教授
富 川 盛 道	所員		

## 専門委員会

また、所長の諮問に依りて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会が三つあり、それぞれ所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1980年度の委員は以下の通りです。

### 研修委員会

相浦杲(大阪外国語大学教授)、池上二良(北海道大学教授)、大東百合子(津田塾大学教授)、小沢重男、五島忠久(帝塚山大学教授)、柴田武、柴田紀男(天理大学助教授)、西田龍雄、半田一郎(東京外国語大学教授)、伴康哉、松山納、三根谷徹

### 言語情報機械処理委員会

植村俊亮(工業技術院電子技術総合研究所主任研究官)、田町常夫、長尾真(京都大学教授)、中山和彦(筑波大学教授)、西村恕彦(東京農工大学教授)、淵一博(工業技術院電子技術総合研究所部長)

### アフリカ学術調査委員会

石川栄吉、泉井久之助(京都産業大学客員研究員)、小堀巖、江実(岡山大学名誉教授)、祖父江孝男、山本達郎(国際基督教大学教授)、和崎洋一(富山大学教授)、渡辺光(日本国際地図学会会長)

# 研 究 活 動

## 共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行なうとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1980年度のプロジェクトと共同研究員は以下の通りです。なおカッコ内は研究代表者です。

### 言語研修（北村 甫）

大河内康憲（大阪外大）	司 博閣（東京外大）	ルプサンゴンチク・バルダン（東京外大）
小俣スシュマ（東京芸大）	鳥羽季義（国際言語研究協会）	ハンギン・ゴンボジャップ（天理大）
川本邦衛（慶応大）	富田健次（大阪外大）	チン・ホ・ホア（東京外大）
佐伯和彦	西江雅之（東京外大）	星 実千代（東京外大）
白石昌也（大阪外大）	蓮見治雄（東京外大）	山形洋一（東京大・大学院生）
千野栄一（東京外大）	キシヨリ・バツタライ	レ・ヴァン・フック（大阪外大）

### 辞典編纂プロジェクト（岡田英弘）

相原 茂（富山大）	慶谷壽信（都立大）	星 実千代（東京外大）
阿辻哲次（奈良女子大）	坂本比奈子（東京外大）	本名信行（金城学院大）
池沢実芳（東北大・大学院生）	佐々木 猛（福岡大）	増野 仁（横浜市立大）
石沢良昭（鹿児島大）	杉村博文（大阪外大）	松尾良樹（奈良女子大）
伊東照司（東京外大）	鈴木陽一（松山商科大）	松村 潤（日本大）
糸賀 滋（アジア経済研究所）	高橋 保（国際大学設立準備財団）	守屋宏則（東京外大）
鶴殿倫次（愛知県立大）	武信 彰（麗沢大）	マイケル・シェラード（同志社大）
太田 斎（都立大・大学院生）	中川正之（神戸大）	チンタナ・保川（東京外大）
落合守和（都立大）	ネアック・ソック・チョムラン	吉田絹枝（神奈川県立上溝南高校）
辛島 昇（東京大）	氷上 正（都立大・大学院生）	藍 清漢（立正大）
川本栄三郎（岩手大）	福田権一（中京大）	渡辺茂彦（北九州大）
神田信夫（明治大）	古屋昭弘（都立大・大学院生）	

### 言語処理研究（松下周二）

上田博人（東京外大）	清水克正（名古屋学院大）	堀口秀嗣（筑波大）
及川昭文（筑波大）	杉田繁治（国立民族学博物館）	八村広三郎（国立民族学博物館）
沢村正信（神戸商科大）	中島 久（東京外大AA研・研究生）	

### アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究（三木 亘）

池田 修（大阪外大）	片倉もとこ（津田塾大）	加納弘勝（アジア経済研究所）
大塚和夫（国立民族学博物館）	可児弘明（慶応大）	禿 仁志（東京外大AA研・研究生）

木村喜博 (アジア経済研究所)	栢植洋一 (東京大)	堀内 勝 (東海大)
後藤 明 (山形大)	富岡倍雄 (神奈川大)	前嶋信次 (慶応大・名誉教授)
後藤 晃 (東京大)	奴田原睦明 (東京外大)	牧野信也 (東京外大)
小松久男 (東海大)	信森廣光 (福山市立女子短大)	松井 健 (京大)
坂本 勉 (慶応大)	蓮見治雄 (東京外大)	宮本常一 (日本観光文化研究所)
佐藤次高 (東京大)	原 隆一 (九州共立大)	山形孝夫 (宮城学院女子大)
ベン・ツィオン・シムエル	平戸幹夫 (拓殖大)	山田 稔
高井清仁 (拓殖大)	福井勝義 (国立民族学博物館)	渡辺金一 (一橋大)
谷 泰 (京大)	本多義昭 (京大)	

**アフリカ学術調査 (富川盛道)**

江口一久 (国立民族学博物館)	岡崎 彰	松園萬亀雄 (横浜国立大)
上田 将 (東京経済大)	長島信弘 (一橋大)	和崎春日 (神奈川大)
上田富士子 (学習院大)	端 信行 (国立民族学博物館)	和田正平 (国立民族学博物館)
大森元吉 (国際基督教大)		

**南アジアの大河流域における農村社会の研究 (原 忠彦)**

石井米雄 (京大)	辛島 昇 (東京大)	谷口晋吉 (一橋大)
白田雅之 (拓殖大)	菱口善美 (駒沢大)	柳沢 悠 (横浜市立大)
長田満江 (アジア経済研究所)	重松伸司 (名古屋大)	

**ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究 (飯島 茂)**

立川武蔵 (名古屋大)	西田龍雄 (京大)	御牧克己 (京大)
長野泰彦 (国立民族学博物館)	星 実千代 (東京外大)	山口瑞鳳 (東京大)
西 義郎 (鹿児島大)	三瓶清朝 (玉川大)	

**アジア・アフリカ諸言語についての文法研究 (奈良 毅)**

大河内康憲 (大阪外大)	徳永宗雄 (京大)	溝上富夫 (大阪外大)
小田真弘 (中大)	鳥羽季義 (国際言語研究協会)	宮岡伯人 (小樽商科大)
カリヤン・ダスグプタ (法政大)	中島 久 (東京外大AA研・研究生)	村崎恭子 (東京外大)
坂田貞二 (拓殖大)	長 弘毅 (アジア・アフリカ語学院)	森口恒一 (防衛大学校)
崎山 理 (広島大)	縄田鉄男 (熊本大)	山田幸宏 (高知大)
杉田 洋 (東京学芸大)	橋本 勝 (大阪外大)	吉川 守 (広島大)
田村すず子 (早稲田大)	早田輝洋 (九州大)	
土田 滋 (東京大)	原 誠 (東京外大)	

**日本の言語文化比較研究資料の充実 (岡田英弘)**

斯波義信 (大阪大)	松本克己 (金沢大)	渡部忠世 (京大)
末成道男 (聖心女子大)		

**アジアの民族運動とその国際関係 (中村平次)**

伊藤秀一 (神戸大)	清水 透 (東京外大)	毛里和子 (日本国際問題研究所)
小田英郎 (慶応大)	中村 義 (東京学芸大)	山内昌之 (聖心女子大)
木畑洋一 (東京外大)	藤田 進 (東京外大)	由井正臣 (早稲田大)
木村英亮 (横浜国立大)	松本脩作 (アジア経済研究所)	

### アジア・アフリカにおける象徴と世界観の比較研究（山口昌男）

青木 保（大阪大）	北岡誠司（奈良女子大）	原 広司（東京大）
阿部年晴（埼玉大）	久米 博（桐朋学園大）	松園萬亀雄（横浜国立大）
市川 浩（明治大）	栗本慎一郎（明治大）	松田 修（国文学研究資料館）
市川雅章（早稲田大）	小松和彦（信州大）	宮坂敬造（大阪大）
今福龍太（日本総合研究所）	中島成久（九州大）	宮田 登（筑波大）
遠藤保子（お茶の水女子大・大学院生）	長島信弘（一橋大）	横井 清
大室幹雄（山梨大）	中林伸浩（金沢大）	吉田敦彦（成蹊大）
木田理文（慶応大・大学院生）	中村雄二郎（明治大）	

なお、1978年度より上記プロジェクトとは一応別に、当研究所において一定期間研究を行なう共同研究員を公募することになり、本年度は次の諸氏が委嘱されています。

堀川 徹（京都大）	山下晋司（広島大）	山本真鳥（東京大・大学院生）
宮脇淳子（大阪大・大学院生）		

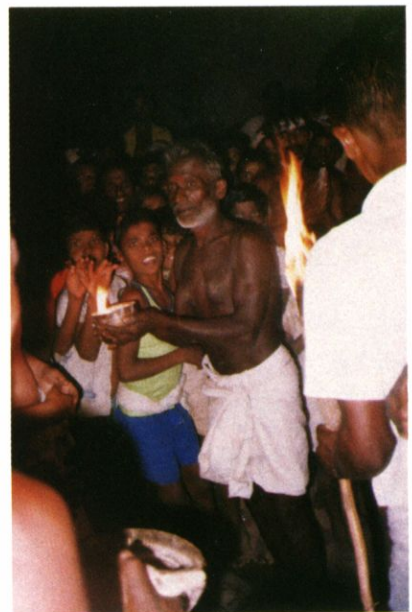
### 研 究 生

また研究生の制度があり、大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。



天然痘の神として畏怖されるマーリアンマン女神の祭。  
女神に灯明を献ずる非バラモン僧と村人達。

（南インドの一農村ネイコラム村にて、奈良 毅）





# 言語情報機械処理

現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して、アジア・アフリカの諸言語のデータを大量に機械処理し、それぞれの言語の音韻論的、辞学的、統辞論的分析はもちろんのこと歴史的、民族学的、社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータ・ベースの作製をはかっています。当研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、またアジア・アフリカ諸国との多面的、多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用にも供されます。この目的のために、一方で各言語のデータに一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、語彙論情報を分析し、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいうようにプリント・アウトするために、デーバナーガリー（ヒンディー、サンスクリット）、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングルなどの文字フォントを作製し実際に使用しています。実際の言語の例としては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、ヒンディー語、クメール語、スワヒリ語、タイ語、チベット語などのデータが蓄積されつつあります。

## 言語データのプリント・アウト例

アラビア語

١٠٣٣٠ و الحروف التي ترفع بعدها الأسماء، والأخبار و هي أيس و حيد و ش و هل و بل  
 ١١٣٣٠ و الحروف التي تنصب الأسماء، بعدها و ترفع الأخبار و هي أن و إن و كان و كن و ليت و لع  
 ١١٣٣٠ - الجمل السامس  
 ٣١٣٣٠ من الوجوه التي تنصب بها الأسماء  
 ٣١٣٣٠ النص يدخل الأسماء من ثلاثة عشر وجهاً المجهول شر فوك ضربت عمراً و خبر ما لم يسم بجمعه شر فوك  
 أُطِيعَ رَبُّهُ رَهْمًا جُنُبٌ مَجْعُولٌ بِهِ وَرَهْمًا مَجْعُولٌ شَان  
 ٤١٣٣٠ و خبر كان و أخواتها شر كان الله تجزئاً رحيماً

チベット語

T1AAVIM20101 |འཇམ་དཔལ་བྱང་རྒྱལ་མཉམས་དཔལ་འཇམས་གྱི་ནད་ནི་དེ་ལྟ་བུ་ཡིན་ནི། ཇལ་ཉི་དེ་  
 ལྟ་མ་ཡིན་དུ་ཟིན་ན། འབད་པ་དོན་མེད་པར་འགྱུར་རོ།  
 T1AAVIM20102 |འདི་ལྟ་སྟེ། དཔལ་བྱང་གྱི་རྩོལ་བ་བཙམས་དཔལ་འཇམས་བྱུ་བ་དེ་བཞིན་དུ་གྲོ་  
 བ་དང། ན་བ་དང། འཆི་བའི་སྐྱལ་བལྟལ་ཞི་བར་བྱིད་པས་བྱང་རྒྱལ་མཉམས་དཔལ་འཇམས་གྱི་རོ།

## 言語研修



左：ビルマ語  
下：ハウサ語



アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおくられていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からほぼ毎夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、

アムハラ語、スワヒリ語、ビルマ語、福建語、チベット語の研修を、それぞれ一言語か二言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行なうことになり、当研究所員を中心にその言語を母語とする人、及び日本人研究者の協力をえて、東京(二言語)と大阪(一言語)で、下記のとおり実施してきました。

- 1974年度 朝鮮語、チベット語(東京)
- 1975年度 カンボジア語、ベンガル語(東京)
- 1976年度 ペルシア語、スワヒリ語(東京)、ビルマ語(大阪)
- 1977年度 広東語、マラーティー語(東京)、モンゴル語(大阪)
- 1978年度 タイ語、トルコ語(東京)、ペルシア語(大阪)
- 1979年度 ハウサ語、ビルマ語(東京)、タイ語(大阪)
- 1980年度 ネパール語、モンゴル語(東京)、ベトナム語(大阪)

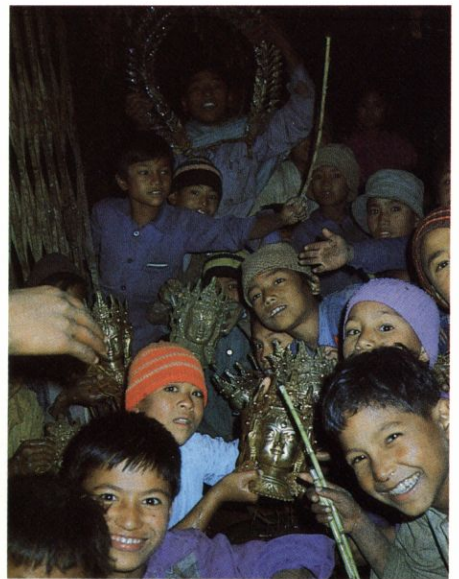
また、1981年には東京でヒンディー語とパシュトー語、大阪で中国語の研修が行なわれる予定です。全国から公募された各言語約10名の研修生は検定料、入所料、受講料を納付し、初級コース226時間の研修を受け、全課程を終えた人には修了証書が授与されます。

## 海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行なうことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りです。

- (1) アフリカ部族社会の比較調査 1969年～1977年
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査 1970年
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動 1972年
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査 1974年～
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然、生態と文化に関する調査 1975年～1976年
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究 1979年～
- (7) ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査 1980年～

— ガンダキ水系諸地域住民のネパール化に関する比較研究 —



カトマンドゥ盆地、ネワールの村にて  
(ネパール、石井 博)  
上：ヴィシュヌデヴィとよばれる女神の  
前夜祭で神像を洗い清める少年たち。  
左：村はずれの池で水牛を洗う少年たち。

## 助手等の現地投入

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。

この計画は1967年から実施され、現在までに合計14名がエチオピア、タンザニア、ナイジェリア、エジプト・アラブ、インド、モロッコ、香港、ケニア、ボツワナ、ザンビア、ザイール、ビルマ、ネパール、イラン、トルコ等々の諸国に派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。



みかんを売る少女の髪に乱れ咲く白いジャスマインの花が市場の雑踏に清々しさを添える。都会でも田舎でもビルマの女性は、生花とりわけ季節のかぐわしい花で髪を飾ることが多い。  
(マンダレーの夜店にて、藪 司郎)



左：バンドル・アッパーズはペルシア湾（アラビア湾）に面した港町。12月半ばでも蒸し暑い。街で遊ぶ子供達の顔つきも、アラブ・イラン・パルチーと民族色豊かである。（家島彦一）  
右：トルコの近衛兵団の軍楽隊（メフテル）の仮装をした少年。イスタンブル征服記念日（1453年5月29日）に毎年行われる仮装行列風景。（永田雄三）



## 外国人研究員

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。現在まで受け入れた外国人研究員は以下の通りです。

- Gordon T. Bowles  
アメリカ 人類学専攻 1967年10月6日～1968年9月15日
- Muhammad Anis  
エジプト 近代史専攻 1968年10月2日～12月25日
- Raouf Abbas Hamed  
エジプト 近代史専攻 1973年4月1日～9月19日
- Yellava Subbarayalu  
インド 南インド中世史専攻 1973年10月1日～1975年10月31日
- Fe Aldave-Yap  
フィリピン フィリピン国語学専攻 1975年9月20日～12月21日
- 金完鎮  
大韓民国 韓国語学専攻 1975年8月20日～1976年7月31日
- Curtis D. McFarland  
アメリカ 言語学専攻 1976年2月20日～1977年2月19日
- 'Abd al-Raḥîm 'Abd al-Raḥmân 'Abd al-Raḥîm  
エジプト 中東近代経済史、アラビア語学専攻 1976年6月6日～10月4日
- Salim Abdulla Wazir  
タンザニア 教育学専攻 1976年6月4日～10月11日
- Bhakti Prasad Mallik  
インド 言語学専攻 1976年7月13日～12月20日
- Karthigesu Indrapala  
スリランカ 歴史学専攻 1976年11月1日～1977年3月31日
- 俞昌均  
大韓民国 韓国語学専攻 1977年4月1日～1978年1月31日
- Søren C. Egerod  
デンマーク 東洋言語学、古典学専攻 1977年9月1日～1978年5月31日
- Bozkurt Güvenç  
トルコ 社会人類学専攻 1978年5月17日～10月31日
- Thubten Jigme Norbu  
アメリカ チベット学専攻 1978年6月27日～1979年3月31日
- André-Georges Haudricourt  
フランス 言語学、植物学、民族学専攻 1978年10月2日～10月31日
- Maria Lourdes S. Bautista  
フィリピン 言語学専攻 1978年10月23日～1979年5月12日
- William S.-Y. Wang  
アメリカ 言語学、音声学、神経言語学専攻 1979年2月15日～7月14日
- Alhaji Faruk Gezawa  
ナイジェリア ハウサ語学専攻 1979年4月12日～12月17日
- Shyamsunder Joshi  
インド ヒンディー文学専攻 1979年5月26日～8月25日
- Dor Bahadur Bista  
ネパール 社会人類学専攻 1979年5月30日～6月20日

Jean-Baptiste Bunkungu

オートボルタ モシ語学専攻 1979年6月1日～9月30日

Paul M. Thompson

アメリカ 中国哲学・文学専攻 1979年9月16日～1980年9月15日

Chandra Mudaliar

インド 国際関係論, 政治学専攻 1979年10月1日～1980年9月30日

Curtis D. McFarland

アメリカ 言語学専攻 1979年10月1日～1980年9月30日

Udom Warotamasikkhadit

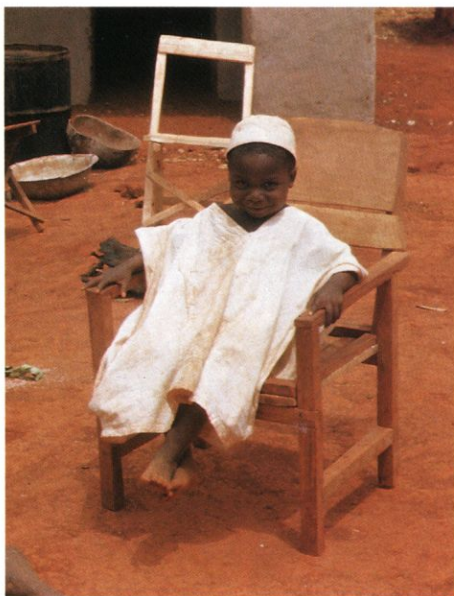
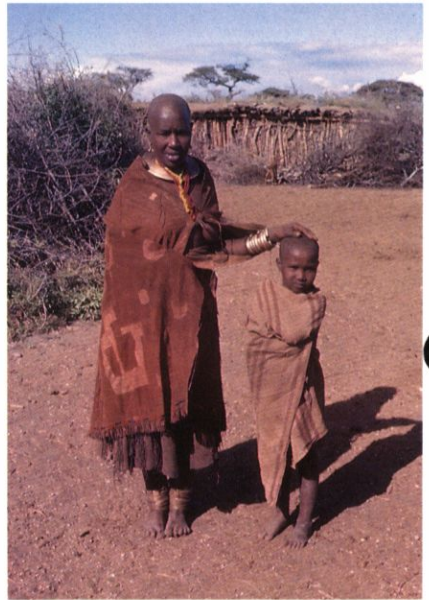
タイ 言語学専攻 1979年11月6日～11月28日

Thomas Sebeok

アメリカ 言語学, 記号学専攻 1980年4月13日～4月27日

傅 懋 勤

中国 言語学, 民族学専攻 1980年6月11日～12月10日



左上：ジャヒ豆を選るケニア・キクユ族の婦人と子供達。キクユ族は多種類の豆を有しているが、ジャヒはとりわけ好まれ、栄養豊かで産後に最適といわれている。（加賀谷良平）

左：西アフリカ・カメルーンのアダマワ地方に住むブーム族の農村の少年。帽子と白衣はイスラムの晴れ着すがた。（日野舜也）

上：東アフリカ・タンザニア北部に住むダトーガ牧畜民の母と娘。母は伝統的な皮製のスカートとケープを、娘は木綿の布を着用している。（富川盛道）

# 施設

## 図書室

アジア・アフリカ研究に必要な図書および図書利用のための設備は、共同利用研究機関として重要な要素です。研究所開設以来図書資料は徐々に増加していますが、その充実については今後とも多大な努力を要します。蔵書の中にはアジア・アフリカ地域の国語教育資料、雑誌(約550種)、新聞(約60種)、世界各国語の聖書、などが含まれています。図書の他に、マイクロ資料もあり、また利用者の便宜を考えてマイクロリーダーとリーダー・プリンターを備えています。



## 音 声 学 実 験 室

「ヨルバ語のトーンなんですが、基本周波数の動きは？」

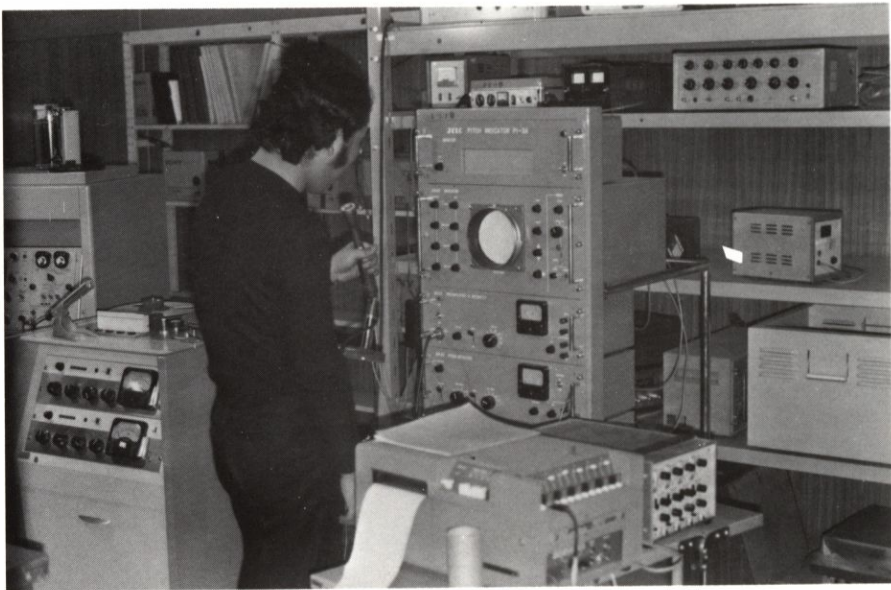
「広東語の声調の上がり下がりを目で見ても確かめたいんですが…」

「フラ語ってどんなことばですか？ 実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケータをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。また、めずらしい言語や、貴重な民話・民族音楽などのテープが複写され、ビデオ録画なども利用しながら研究分析を行っています。

また付属施設の“音声・言語研修資料室”には各種の語学レコードおよび録音テープがあり、研究者の利用の便をはかっています。





## 電 算 機 室



上：電算機室  
左：タイ語データの校正作業中のグラフィック・ディスプレイ端末



当研究所では、1978年1月から、HITAC M-150システムを導入しました。内部メモリーは512KB、ディスク装置は4スピンドルで合計800MB、磁気テープは2デッキあります。入力にはパンチカード、マークカード、紙テープが使えます。出力のためにはラインプリンタの他に漢字プリンタがありますが、これを使用して、大きさも形も様々なAA諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されています。

このほかのソフトウェアとしては単語の用例検索システムが準備されています。これはAA諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままでパンチ、入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

またグラフィックディスプレイもあり、AA諸言語の研修の自動化等の開発研究も行なわれています。

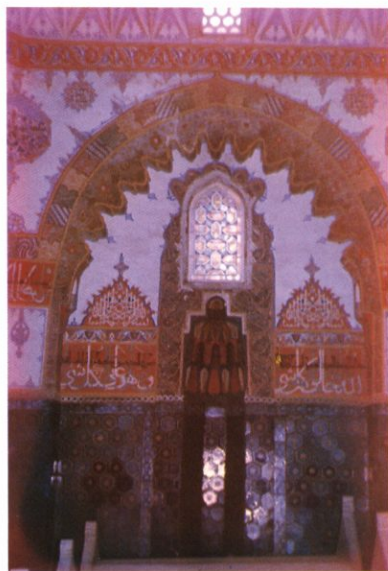
1979年度に導入された画像処理システムは、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に威力を発揮しています。

# 職 員

所長 (併) 北 村 甫

## 研 究 部 (五十音順)

- |                           |                          |
|---------------------------|--------------------------|
| 教授 飯 島 茂 樹：アジアの国民形成       | 助手 梶 茂 樹：バントゥ諸語          |
| 教授 石 垣 幸 雄：文論             | 助手 清 水 宏 祐：西アジア史         |
| 教授 梅 田 博 之：朝鮮語            | 助手 新 谷 忠 彦：言語哲学          |
| 教授 大 江 孝 男：朝鮮語            | 助手 高知尾 仁：アフリカの象徴論        |
| 教授 岡 田 英 弘：東アジア史          | 助手 辻 伸 久：中国語             |
| 教授 北 村 甫：チベット語            | 助手 内 藤 雅 雄：インド近代史        |
| 教授 坂 本 恭 章：オーストラアジア諸語     | 助手 中 見 立 夫：内陸・東アジアの国際関係史 |
| 教授 富 川 盛 道：アフリカの社会と文化     | 助手 羽 田 亨 一：イラン史          |
| 教授 中 村 平 次：インド現代史         | 助手 水 島 司：南インド近現代史        |
| 教授 奈 良 毅：インド・アーリア諸語       | 助手 森 幹 男：インドシナ比較文化史      |
| 教授 橋 本 萬太郎：シナ・チベット諸語      | 助手 藪 司 郎：チベット・ビルマ諸語      |
| 教授 日 野 舜 也：アフリカ都市社会の比較研究  | 助手 山 本 勇 次：東南アジアの文化人類学   |
| 教授 山 口 昌 男：文化記号論          |                          |
| 助教授 石 井 導：南アジアの人類学        |                          |
| 助教授 加賀谷 良 平：音響音声学         |                          |
| 助教授 上 岡 弘 二：イラン語          |                          |
| 助教授 川 田 順 造：西アフリカ社会       |                          |
| 助教授 中 嶋 幹 起：中国語           |                          |
| 助教授 中 野 暁 雄：セム・ハム諸語       |                          |
| 助教授 永 田 雄 三：トルコ近代史        |                          |
| 助教授 原 忠 彦：イスラム教徒社会        |                          |
| 助教授 松 下 周 二：アフリカの言語       |                          |
| 助教授 三 木 亘：イスラム近代史         |                          |
| 助教授 守 野 庸 雄：日本語・スワヒリ語対照研究 |                          |
| 助教授 家 島 彦 一：イスラム中世史       |                          |
| 助教授 湯 川 恭 敏：理論言語学，バントゥ諸語  |                          |



モスクの壁面装飾。15世紀オスマン王家の王子たちの廟。(ブルサ)  
(永田雄三)

## 事務部

事務長 坂元 治  
 文部事務官 宮森 てる子  
 事務長補佐  
 文部事務官

## 庶務係

係長 下野 茂  
 文部事務官 井上 由美子  
 文部事務官 松本 省三  
 文部事務官 福井 光雄  
 文部事務官 谷川 かつ子  
 (タイピスト)  
 文部技官 塙 和雄  
 (自動車運転手)

## 渉外係

係長 隅田 浩  
 文部事務官 松岡 環  
 文部事務官 佐久間 敬喜

## 会計係

係長 戸田 孝司  
 文部事務官 田川 恵二  
 文部事務官 佐藤 秀規  
 文部事務官 成瀬 智  
 文部事務官 田村 猛  
 文部技官 富澤 貞夫  
 文部事務官 金子 鍵蔵  
 (守衛)  
 用務員 植田 カツエ

## 共同利用係

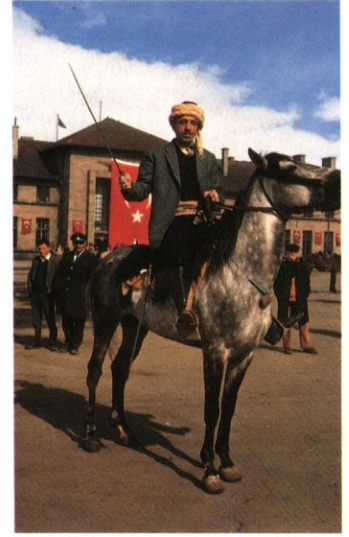
係長 遠藤 吉則  
 文部事務官 津田 貞子  
 文部事務官 金井 京子  
 文部事務官 大村 和子  
 文部事務官 乙訓 寛雅

## 研修・情報処理係

係長 浅見 義則  
 文部事務官 岡田 ほなみ  
 文部事務官 中嶋 弘子  
 文部技官 今井 健二

## 図書係

係長 石橋 徳三郎  
 文部事務官 図書主任 石川 恵子  
 文部事務官 中川 陽子  
 文部事務官 鈴木 喜久子  
 文部事務官 須郷 知子  
 文部事務官 山木 宏明



第一次世界大戦後のトルコ民族解放運動に活躍した義勇兵の後裔(エルズルム市庁舎前で)。

下は、トルコ・エルズルム地方の民族舞踊。勇壮な騎馬民族の伝統を伝えている。楽器はズルナと太鼓。

(永田雄三)



# 出版 物 一 覧

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. 1(1968), 2(1969), 3(1970), 4(1971), 5(1972), 6(1973), 7(1974), 8(1974), 9(1974), 10(1975), 11(1976), 12(1976), 13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979).

アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos. 1~38. (1966~80).

## アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アママン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
6. NAGATA, Y., *Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasûlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. McFARLAND, C. D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
9. McFARLAND, C. D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*. Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*. Vol. 2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, M. L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*, 1979.

## アジア・アフリカ基礎語彙集

1. 山本謙吾, 満州語口語基礎語彙集, 1969.
2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971.
3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972.
4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973.
5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974.
6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975.
7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976.
8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977.
9. 奈良 毅, *Avahat̪ṭha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan Languages*, 1979.
10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979.
11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980.

## 共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.  
アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. 1(1968), 2(1969), 3(1970), 4(1971), 5(1972), 6(1973).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. 1(1972), 2(1972), 3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. 1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979).
7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:
  11. Korean (梅田博之), 1973.
  - 11z. Ainu (村崎恭子), 1978.
  - 12b. Fukienese (中嶋幹起), 1976.
  - 12z. Tibetan (北村 甫), 1977.
  - 13a. Hindi (溝上富夫), 1980.
  - 13b. Marathi (内藤雅雄), 1976.
  - 13c. Bengali (奈良 毅), 1979.
  - 13d. Khaling (鳥羽季義), 1979.
  - 13y. Malayalam (伊藤正二), 1978.
  - 14a. Cambodian (坂本恭章), 1974.
  - 14b. Burmese (藪 司郎), 1974.
  - 14c. Thai (森 幹男), 1975.
  - 15b. Philippine (山田幸宏, 土田 滋), 1975.
  - 16b. Samoan (小田真弘), 1977.
  17. Persian (上岡弘二), 1976.
  - 17s. Shughni (縄田鉄男), 1980.
  20. African (石垣幸雄), 1975.
  21. Swahili (守野庸雄), 1976.
  - 22a. Cushitic (石垣幸雄), 1972.
  - 22b. Ethiopic (石垣幸雄), 1978.
  23. Hausa (松下周二), 1974.
  26. Fulfulde (江口一久), 1974.

33. Romance & Greek (石垣幸雄), 1973.      34a. Albanian (石垣幸雄), 1979.  
 33y. Basque (石垣幸雄), 1979.              36. Uralic etc. (石垣幸雄), 1976.  
 33z. Maltese (石垣幸雄), 1977.  
*Grammatical Manual* (文法便覧),  
 40. USSR (石垣幸雄), 1980.
8. アフリカ部族社会の比較研究：1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), 2. アフリカ社会の地域性(1973).  
 9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1(1974).  
 10. アジア・アフリカ語の計数研究, 1(1975), 2(1975), 3(1976), 4 (鄒 嘉彦：老乞大諺解単字索引, 1976), 5(坂本恭章：カンボジア語小辞典, 1976), 6(1976), 7(1977), 8(1978), 9(1978), 10(1979), 11(1979), 12(Anne O. Yue: The Teng-Xian Dialect of Chinese, 1979), 13(1980), 14(藍清漢：中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(Michael Sherard: A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai, 1980).  
 11. *Oceanic Studies*, No. 1(1976).  
 12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集 1(1976), 2(1977).  
 13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究：南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979).  
 14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK, 1(1977), 2(1978), 3(1979).

### AFRICAN LANGUAGES AND ETHNOGRAPHY

1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.  
 2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.  
 3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Férô6e du Diamaré: Maroua et Pétte*, 1976.  
 4. EGUCHI, P. K., (tr.), *Shi'r al-Ṭaba (Poem of Repentance)*, 1976.  
 5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.  
 6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.  
 7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G/wi Dialects*, 1978.  
 8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foul6e du Plateau de L'Adamaoua au XIX siècle*, 1978.  
 9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue—Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.  
 10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.  
 11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroun I*, 1978.  
 12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemands du Cameroun*, 1978.  
 13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroun II*, 1980.

### STUDIA CULTURAE ISLAMICAE

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.  
 2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.  
 3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.  
 4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftliks) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.  
 5. MIYAJI, K., "Kacem Ali"—*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.  
 6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.  
 7. MIKI, W. & 'Abd al-Raḥîm., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study*, 1977.  
 8. MIKI, W., HONDA, G. & M. Salah Ahmed, *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*, 1979.  
 9. YAJIMA, H. & KAMIOKA, K., *The Inter-Regional Trade in the Western Part of the Indian Ocean—The Second Report on the Dhow Trade—*, 1979, [in Japanese].  
 10. KAMIOKA, K., & YAMADA, M., *Lārestāni Studies I. Lāri Basic Vocabulary*, 1979.  
 11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.  
 12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.  
 13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary, an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.

14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life I—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic—*, 1979.

## MONUMENTA SERINDICA

1. IJIMA, S. (ed.), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. (compl.), *The Newari Language—A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas—*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies I*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.

## 言語研修テキスト

- |                                 |                                  |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1. チベット語, 北村甫ほか編, 全5冊 (1974).   | 9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊 (1977). |
| 2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊 (1974).    | 10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊 (1977).  |
| 3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊 (1975). | 11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊 (1978).   |
| 4. ベンガル語, 奈良毅編, 1冊 (1975).      | 12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊 (1978).    |
| 5. ビルマ語, 大野徹ほか編, 全5冊 (1976).    | 13. ペルシア語, 勝藤猛ほか編, 全3冊 (1978).   |
| 6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊 (1976).  | 14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊 (1979).   |
| 7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊 (1976).  | 15. ビルマ語, 藪司郎編, 全3冊 (1979).      |
| 8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全4冊 (1977).    |                                  |

## 特定研究「言語」出版物

### 「文字と言語」研究資料

1. HASHIMOTO, M. J., *hP' ags-pa Chinese*, 1978.
2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化 (資料集), 1978.
3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字 (資料集), 1978.
4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集 (I), 1979.
5. SIMON H. Schaank, *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
6. 吉田忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集 (II), 1980.

### 「AA諸言語と日本語の学習」資料

- 77-1. 梅田博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語 1, 1978.
- 77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語 1, 1978.
- 77-3. 坂本恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語 1, 1978.
- 78-1. 梅田博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語 2, 1979.
- 78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語 2, 1979.
- 78-5. 奈良毅: 基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディ語 1, 1979.
- 78-6. 内記良一: 基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語 1, 1979.
- 78-7. 守野庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語 1, 1979.
- 78-8. 梅田博之ほか: 助詞対照用例集 1: 「の」日本語—AA諸言語, 1979.
- 79-1ab. 梅田博之ほか: 日本語の発音 (朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.
- 79-3. 坂本恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語 2, 1980.
- 79-5. 奈良毅: 基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語 2, 1979.
- 79-6. 内記良一: 基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語 2, 1980.
- 79-7. 守野庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語 2, 1980.
- 79-8. 梅田博之ほか: AA諸言語教育基本語彙表, 1980.

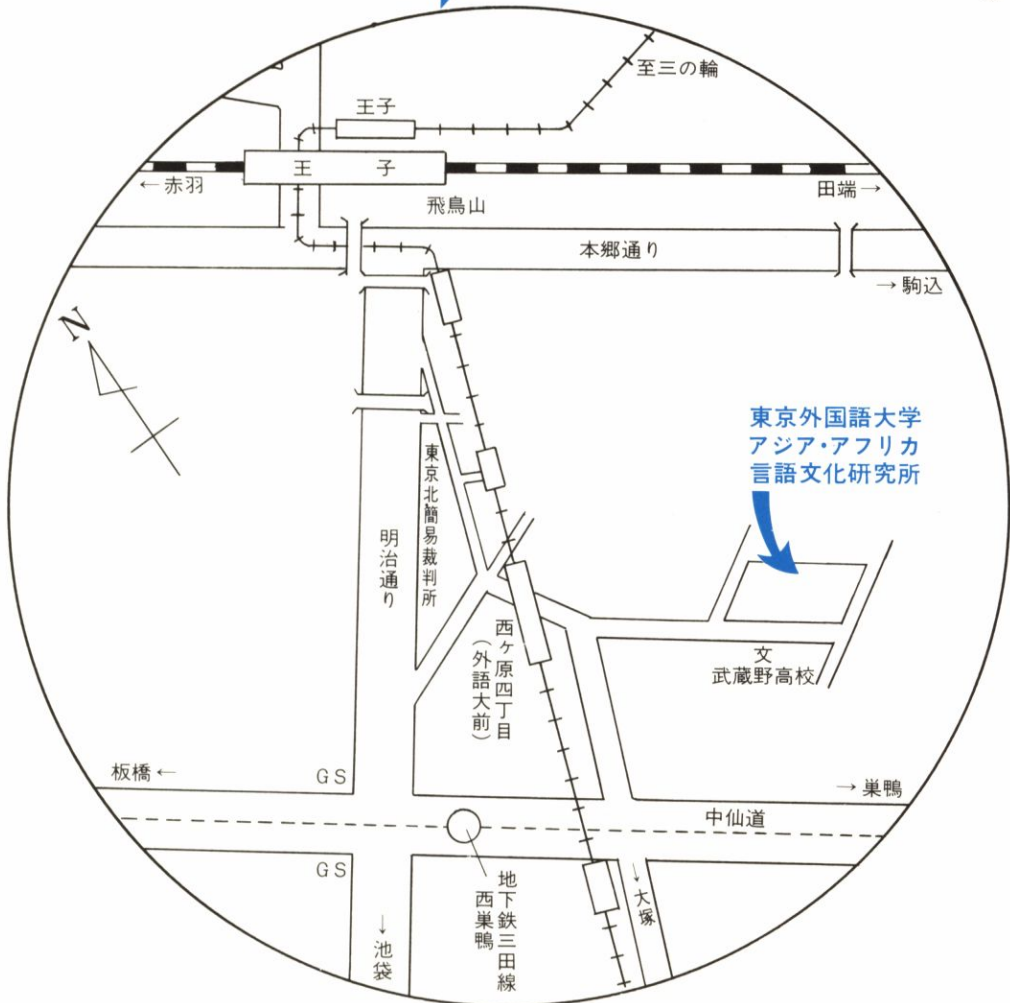
**東京外国語大学**  
**アジア・アフリカ言語文化研究所**

東京都北区西ヶ原4丁目51番21号 〒114

TEL 03-917-6111

国電大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原4丁目  
 (外語大前) から徒歩約5分

地下鉄・都営三田線西巢鴨下車15分





INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES AND  
CULTURES OF ASIA AND AFRICA

(ILCAA)

TOKYO GAIKOKUGO DAIGAKU